

ラシーヌの古典悲劇

村 島 実 恵 子

ラシーヌの悲劇に見出されるもの、それはギリシア美とキリスト教の背景及び17世紀のフランスにおけるルイ14世王朝の生活が漠然として描き出されている事である。

ラシーヌの劇はフランス古典美を余す処なく語っている。ユーゴやスタンダールも古典劇についてはシェークスピアか、ラシーヌかと云って論じている。シェークスピアは劇の性質上ロマンティックにラシーヌは古典劇の特色を示していると云われる。前者はイギリス人の特性を、後者はフランス人の特性を示している。しかし乍らシェークスピアとラシーヌの創作時代には80年の隔りがある。即ちシェークスピアの時代は英国16世紀後半、ラシーヌは17世紀後半で、ラシーヌの時代は日本の近松門左衛門、井原西鶴、松尾芭蕉の時代とほぼ同じくしているのである。

フランスの古典悲劇はコルネイユによって基礎を固められ、ラシーヌによって完成されたと云っても良いであろう。

ラシーヌの生涯は三つの大きな時代に区分して考える事が出来よう。第一は彼の生れた1639年から1664年までのラシーヌ、25才迄の期間で後の彼の才能が発揮される準備期間とも呼ばれる時代である。

ラシーヌは1639年12月21日シャンパーニュ地方の Ferte-Milon で町の塩販売事務所の書記をしていた Jean Racine と Jeanne Sconin の息子として生れた。幼くして両親を失った彼は両親のことは良く憶えていない。彼の

母は妹マリーの誕生の翌年の1月28日に亡くなった。1643年2月6日彼の父も世を去った。

彼と妹は孤児になり、その上多額の借金を残された。彼等二人はラシーヌの代母でもあった祖母マリー・テムランの許に引きとられて行く事になった。彼女の娘アニエスは13才年上でラシーヌや妹マリーの良き母親代りの役目を果した。後年彼女は Port-Royal の女子修道院長になる。

“De treize ans son ainée, Agnes se montre une vraie mère pour l'enfant, ce qui explique les remontrances quelle lui fera plus tard quand elle craindra pour son ame. (註1)

ラシーヌは祖父母達と一緒に生活するようになって、教会と Port-Royal の影響を受け始める。“キリスト教精神で日常生活の小さな動作も始められる”とモーリアックは言っている。この影響は祖父 Sconin の死によって増加させられた。その時祖母のマリー・テムナンは娘アニエスを Champs の Port-Royal に入れる事に決めた、1649年であった。

1649年から1653年ラシーヌは Port-Royal の附属学校の生徒として過した。Champs や Paris 地方では生徒達は司祭と生活を共にしていたのでラシーヌもキリスト教の雰囲気の中で過ごして行った。次いで1655年迄は中学校及び高校生活を送ることになる。高校もジャンセニスムに属していた。1655年彼は Port-Royal に戻り、其処に3年間勉強の為に止まった。このようにラシーヌは家庭の中でジャンセニスムの影響を身につけ、Port-Royal の中学校でも Beauvais の高校に於てもその教育法によって古典の泉にふれつづけていたと云う事になる。ラテン語教授であった Nicole に再会し、ラシーヌはプロヴァンシアルの翻訳をラテン語でする様に云われる。又彼は Port-Royal 派の卓越したギリシア語学者 Lancelot にも再会する事によって Beauvais の高校で見出していたギリシア語に対する興味が増大していったのである。Lancelot は彼の勉強を見守り、ギリシアの有名な作品や「Theagene et Chaniclee」を二度に互って教えた。ラシーヌはそのギ

ロシアの古典を暗記したと書き記している。中学時代のラシーヌは Port-Royal の医者 Jean Hamon に影響を受けた。この学識豊かな医者は Port-Royal の司祭達の中では一番温和で人の病気をいやすと共に心をも注意深く治していった人であり、ラシーヌは彼を一番尊敬していたと書いている。

Port-Royal での3年の生活がラシーヌに決定的な影響を与えた事になる。1643年から1661年と云う短い開学期間にも拘わらず教育法に於ては他の学校の教育法を引き離していた。其処では数人の生徒に一人の教師と云った小グループの勉強法であった。教師達はジェズイット派で行うラテン語教育法でなくフランス語での教育を行っていた。生徒達は先ずフランス語を上手に書くように教育され、そして現代語、特にスペイン語、イタリア語及び数学の勉強等を重視していた。それらは当時のジェズイット派の学校では等閑視されていたものであった。

ラシーヌは聖書、聖オウギュストの告白録を読んだ。又、ローマ詩人ウィルギリウスについての詩の註釈等も試みている。テキストとしてはギリシア作家の作品も読まされていた。その上、ソフォクレスやエウリピデスの作品も暗記していたと云われる。肉体と精神の根源をラシーヌは Port-Royal でしかも純粋なフランス語で教師達に教育されたのである。

修辭学の教師は彼に文意法を教え、ラテン語学者やギリシア語学者は彼を古代文化の精通者にならせた。人間の悲劇、信仰への導きである良心の指導者、聖悲劇、人間の弱さ、崇高さ等はラシーヌの作中人物の心理描写となって表現されつくしている。殊にモラルの根源、それは宗教的見地から丈でなく、労働と思考、熱烈な信仰と確固とした自信から生れ出でたものと云うよう。

ジャンセニズムの地 Port-Royal は人間的にも聖なる場所であった。この附属学校は17世紀のフランスで身につける事が出来る最高のギリシア精神を新しい教育法で与え、時代に先行していたのである。ラシーヌの知的、モラルの活動力はラシーヌの数年間の勉学中に身についたばかりでなく、

ヴィルギリウスの詩の美しい韻詩が少年の心を満たしたものと思われる。Port-Royal での勉強のお陰でラシーヌはより真実に、より偉大になると共に異教徒的又、キリスト教的詩人でもあったとも云えよう。

1658年ラシーヌは Port-Royal を去ってパリのアルクールの高校で一年間哲学の勉強をしている。そこでラシーヌは父の従兄弟でリーヌ公爵の秘書をしていたニコラ・ヴィタールに再会した。ヴィタールはラシーヌより15才年長であった。ラシーヌは社交界に紹介され、Port-Royal での教育が与えなかったものを発見した。ラシーヌはこの頃ラ・フォンモーヌと知り合いになった。当時ラシーヌはルイ14世の結婚に際し、女王の為にLa Nymphe de la Seine を書いた。内容は貴族達の眼を意識して書いた作品であったが1660年出版された。韻詩は大変美しく詩的であり戯曲にでも出来るであろうと評された。文学者としての野心にかられたラシーヌは貴族達の厚遇を得ようとして、しばしば社交界に出入し、ブルゴーニュ座等の役者達の処にも出入りするようになった。モーリアックも言っているように社交界に出入りし役らの気にいられるようにと務めた。

“Il est fort desireux de pousser dans la monde et ne negligé aucun de ceux qui peuvent la servir” (注²)

1661年の秋、ラシーヌが書き上げたばかりの二つの戯曲「Amasie」と「Les Amours d'Ovid」はマレ座で上演する事を拒否され、後、パリを離れ、ユゼの司教代理をしている叔父スコナンの許で神学を学ぶ為に出かけた。この教会での特権は年金が得られる事であった。ラシーヌはこのプロヴァンス地方で昼間の光と夏の夜の素晴しさを満喫したのであった。ヴィルギリウスの詩を読み返し、再びギリシア悲劇の註釈をつけたり、聖書、聖トマを学び、1663年初め、リーヌ公爵のいるパリに戻った。1年間に彼は二つの韻詩を書きあげた。パリの社交界でラシーヌはサンタニアン伯爵によって宮廷に紹介され、そこでオアローと知り合いになる。これは長いまじめな友情の始まりとなった。次いで彼はルイ14世に受け入れられ、モリ

エールと知り合いになる。翌年マリ・テムランがパリの Port-Royal で亡くなった。

1664年6月20日、ラシーヌは「Thebaide」の初演をした。この作品はパレ・ロワイアルでモリエール一座によって上演されたが余り成功しなかった。内容はオディプスの二人の息子の間でくり広げられる争いを物語っていた。ロトルやセネカの模倣で現在では我慢ならないものだとモーリアックも書いている。

“Cest une piece imite de Rotrou et, a trarers lui, de Senegue et dont la lecture aujourd’hui est ā peu pres insoutenable” (注3)

1665年12月4日ラシーヌは彼の新しい悲劇「Alexandre」を同じ座で上演させたが役者達が平凡であり、又、モリエールもイタリア式に身ぶりの演技表現になれていた為、劇の雰囲気をおとしたとも云われている。

ソフォクレスやセネカの「フェードル」に影響をうけてラシーヌもフェードルを書き始めた。このテーマはラテン文学の中にも表れ、フランスでもこのテーマについての作品が書かれている。Garnier の「Hippolyte」(1573年)、La Pineliere (1675年)、Gilber (1646年)、Bidard (1675年)、Pradhonの「La Phedre et Hippolyte」はラシーヌの作品と同じ頃出版されている。ラシーヌはギリシアの悲劇作家エウリピデスの作品を範としている。王Theseの妃Phèdreは彼女の義理の息子Hippolyteに気持を寄せ、死を選んだ。怒ったTheseは無実の息子を殺させる為に人を赴かせた。

ラシーヌのフェードルは1677年1月1日パリでブルゴーニュ座で「フェードルとイポリット」の題名で初演された。ラシーヌ38歳の年で、前作「イフィジェニイ」上演以来2年数ヶ月経過している。創作の時期については、ミストリ宛てのピエール・ペールの手紙で「ラシーヌは悲劇「イポリット」を執筆中である」と書いている。この作品を初演の際、ブイヨン公爵夫人らを中心とする反ラシーヌのグループがジャック・ブラドンに同名の悲劇「フェードル」を書かせ、ラシーヌの作品初演直後の1月3日

ゲネゴー座で上演させ、これをめぐって両者の支持者の間に激しいやりとりがあった。このことでラシーヌは彼の作品「フェードル」を公にした後、創作の世界から長い事遠ざかり、世俗的なテーマを扱った悲劇を書くことを断念したのである。

ラシーヌの「フェードル」は1654行の12音綴詩句からなり、語句の美しさは比類のないものとされている。この作品で使われた単語は約1700種位である事を考え合わせると言葉のもつ不思議な可能性を私達に理解させてくれる。フェードルはエウリピデスに主題を仰いだギリシア悲劇であり、アリストテレスが悲劇の主人公に要求する憐憫と恐怖を誘うに相応しい内容である。フェードルは完全に有罪でも無罪でもなく、彼女自身がその宿命を忌わしく思っていることでも分る。ラシーヌの独創性はフェードルの夫テゼー王戦死の誤報がもたらされた事とイポリットがアリシ姫に思いを寄せている事であろう。フェードルが義理の息子イポリットに思いをうちあけるのは、夫テゼーが戦死したと云う知らせ（誤報）を受けた後であり、フェードルの告白がこれによって正当化されるとは云えなくともフェードルの苦悩が観客の同情を強くひく契機になっていることである。フェードルはイポリットに熱烈な愛情を抱き乍らその事を誰にも云えず苦しみで衰弱して行く、フェードルは自分の気持をはっきり示せないでイポリットに反って辛く当り、数知れぬ意地悪をなし、遂には国外追放遣しようとする。この気持を夫テゼーの外戦中乳母丈に打ち明けるのである。忠義心の強い乳母はこのことをイポリットに知らせたのであった。この事を怒り、己を恥じたフェードルは死を企てた。この事を知ったテゼー王は息子を怒りのあまり殺させようとした。アルテミの証言によってイポリットの無実を知り、父王テゼーの腕の中で息子イポリットは死んでいった。ラシーヌはセネカが試みた以上に強くフェードルを前面に押し出している。中心人物であるフェードルを背徳の女性として描くのではなく、自己の感情を抑制し、苦悩の果てに身を滅ぼす宿命の女性を描こうとしている。

ラシーヌは異教徒であるフェードルをキリスト教徒に近いような人物として描き出している。フェードルが意識の力によって自分の感情を抑えようとしながら抗しきれない宿命によって破局に導かれて行く筋はギリシアの悲劇の骨格をなしている宿命と同意義をなしている。

ラシーヌが「フェードル」を発表して世俗劇の筆を絶った12年後に発表した「エステル」、14年後の「アタリー」は宗教劇であった。ラシーヌの「フェードル」は現在に至る迄コメディイ・フランゼーズで1000回以上上演されている。ラシーヌの「フェードル」の材料となったものにラシーヌが暗記までしたと云われる「デアジエスとカリクレ」の悲恋物語が考えられる。

ラシーヌの劇は情熱を通して見た人間性の確立であり、フランス語劇の中に初めて解放された情熱を豊富に想起させており、女性は情熱によって完全に解放され男性と同位置に置かれている事であろう。ラシーヌの劇はギリシア劇の中から余分なものを取り除き、純粋な劇の要素でゆるぎない形式を構成し、フルスピードで廻転する歯車のように、人生の重要な瞬間が刻一刻と進展して行き最後のカタストロフ迄息をもつかせず導いて行き、凝集した意識と緊張感で読む者に感動を起させる。

注1 : J. Salles, Commentaires.

注2 : F. Mauriac, Vie de Racine

注3 : F. Mauriac, Racine

参 考 文 献

R. Picard : da carriere d Jean Racine

J. Lempert : Phedre (Larousse Unirersite)

F. Mauriac : Vie de Racine

CH. Dedeyan : Racine et sa "Phedre"

M. Delcroix : Le sacre dans les les tragedies protanes de Rocine

Racine : Phédre